北京版西蔵（チベット）大蔵経の想い出

教授　兵　藤　一　夫
（仏教学〈インド・チベット仏教〉）

大谷大学図書館は仏教関係の文献に関しては、多くの貴重書を含めて、質・量共に他の大学や研究機関を凌駕する蔵書を有している。特に、チベット関連の所蔵文献は世界でも有数のものであろう。その中で、私にとって想いの深いものが北京版西蔵大蔵経である。

私自身、仏教を研究する中で本格的にチベット語文献を読み始めたのは、大谷大学大学院（修士課程）に入ってからであり、修士論文「経量部の異熟説」で使用した資料『倶舎論』や『成業論』を読解することを通してであった。その時のチベット語の学習は、最初にきちんと文法の授業を受けることもせずに、稲葉正就先生の『チベット語古典文法学』を傍らに置いて、チベット語の辞書（特に蔵英辞典・蔵梵辞典や索引類）を引きながら、『倶舎論』のサンスクリット原典をチベット語訳と対照させて読むことであったと記憶している。

この方法は、私の関心がインド仏教にあったこともあり、先ずサンスクリット語原典のあるものはそれを中心に漢訳とチベット語訳を対照させながら読むという、本学の山口益先生が日本において確立した近代仏教学の文献学的方法論に沿うものでもあった。今でもチベット語訳された仏典の正しい読解力の養

成法としては有効なものであろうと思われる。（ただ、このやり方だけでは、チベット人の著作した文献の読解には不十分であることを後に気づかされることになったのだが）

その場合にとても役立ったものが、大谷大学図書館の所蔵する北京版西蔵大蔵経の影印版（冊子体）であった。影印版（全168巻）の出版は1961年に完成するが、その当時は、同じ文献を所蔵するパリのフランス国立図書館での閲覧は容易でないこと、1990年頃まではデルゲ版等の他版の西蔵大蔵経も容易に見られなかったことなどを考慮すると、世界の仏教研究やチベット研究の発展に大きく寄与したことは多くの認めるところである。大谷大学としては、佐々木月樵第３代学長の「仏教を学界に解放する」という立場に沿った当然のこととは言え、貴重資料の公開の意義の大きさを実感させられる。

それに、私が西蔵大蔵経を本格的に利用し始めた時期は、丁度コピー機が普及し始めた

頃でもあり、学生の私でも影印版から必要な所を容易に安価にコピーすることができたので、影印版の資料的価値は倍増していたと思われる。しかも、影印版を通してチベット語文献を読むことは、チベット語をローマ字に転写したりせずに直接チベット文字で読むことになり、今でもローマ字転写が主流であるサンスクリット文献とは大きく異なる状況を作り出しており、影印版刊行の隠れた効用の一つのように思われる。

この北京版西蔵大蔵経との縁は、私が博士後期課程に入った時にさらに大きなものとなった。当時、大谷大学では西蔵大蔵経の勘同目録を編纂するために「西蔵大蔵経勘同目録編纂所」が設置されており、それが図書館内に置かれていたが、その編纂作業に携わることになったのである。勘同目録とは、本学所蔵の北京版所収の各文献の標題と奥書き（コロフォン）を基に、テキストの題名（サンスクリット語とチベット語）・著者・翻訳者、奥書き記載の重要情報を示し、対応するチベット大蔵経の他の版（デルゲ版とナルタン版）と、そして梵本と漢訳がある場合はそれらをも併せて、勘同（対照）した目録である。

その時に、出会ったのがツルティム・ケサン（白館戒雲）先生である。ツルティム先生は、当時、大谷大学の非常勤講師をされながら、図書館のチベット蔵外文献の整理や勘同目録編纂の相談にのっておられた。その時、丁度、目録編纂作業が般若経の註釈書である『現観荘厳論』の箇所であったので、ツルティム先生からチベット仏教の伝統の中での『現観荘厳論』の意義を教えていただいた。そのことがなければ、その後にチベットの学僧タルマリンチェンの『現観荘厳論』の注釈を読んでの成果である最初の拙著『般若経釈 現観荘厳論の研究』（2000年）もなかったであろうし、『現観荘厳論』は今後も何とか読み続けていこうという現在の想いもなかったであろう。

編纂作業はその後1981年に真宗総合研究所が設立されると共に、「西蔵文献研究班」に移されるが、私も引き続きその研究班に加わり、編纂作業を続けることになった。勘同目録の編纂作業はその後も若い研究者たちの尽力によって続けられ、1997年論部の『丹殊爾勘同目録』II- 3 の刊行をもって完成する。1930年の経・律部の『甘殊爾勘同目録』I の刊行から、長き中断を挟みながら、足掛け50余年に及ぶ事業が一応終了したのである。

一方で、大谷大学は大蔵経以外（蔵外）のチベット語文献も貴重なものを含めて多く所蔵しているので、「西蔵文献研究班」は真宗総合研究所の主要研究プロジェクトとして継続され、蔵外文献の目録編纂なども併行して進め、『西蔵蔵外文献目録』『同目録索引』等として刊行した。また、パソコンやネット上でチベット文字の使用が可能なチベット語システム“Tibetan Language Kit for Mac”（これを基にしたものが現在の Mac に標準装備されている）を開発し、それを利用しての本学所蔵文献の公開などが行なわれてきたし、これからも継続されることであろう。それらにまつわることを想い出すと感慨深いものがある。